

素 顔 拝 見



口腔病理学講座
助教授 程 琺

上海生まれ上海育ちのわたしですが、いまは新潟に生活しています。不思議だと思われるだろうと、いつも考えています。

1980年代のはじめごろ、中日友好交流事業の一つとして、上海―大阪は姉妹都市の提携を結びました。また、当時在職していた上海第二医科大学は大阪歯科大学と姉妹校になり、学術交流が始まりました。そのため、わたしは1984年4月に、大阪歯科大学に派遣され、初めて日本国の土を踏むことになり、一ヶ月間の短期滞在をしました。その半年前に、大阪に行くことになるかもしれないことを知り、日本語を独学しはじめました。日本語の漢字をみると中国語のとあまり変わらないようですが、文法と読みかたは全然ちがうので大変でした。日本人の先生とはじめて日本語で交流ができたときのよろこびは、いまでも鮮明に記憶しています。

その時期から、中国を訪問する日本人の先生が多く増えるようになりました。先生がたが大学の学術講演をなさるたびに、わたしが日本語通訳を担当し、日本人の友達もできるようになりました。ある日、突然、「日本に留学に行きたくないか」と日本人の先生に聞かれました。その当時、自分ではアメリカに留学に行く夢を抱いていたので、「いいえ」とかたく断ったのですが、親切にも留学の機会を与えてくださって、長崎大学歯学部助手として留学することとなりました。中国では、

医学部を卒業した後、病理医としての養成コースにしたがい、一年間、大学附属病院にて外科医として勤務しました。その後、病理学講座に入局し、教育・研究・病理診断を経験し、忙しい毎日でした。そのまま6年間も過ぎ去ったのですが、知識の不足を痛感したため、もう一度勉強する意欲が強くなりつつありました。運にめぐまれ、その年から、中国の文化大革命により十年間も中断された大学院入学制度が再開されることになり、わたしは直ちに上海第二医科大学大学院に入学試験を受けることに決意し、腫瘍病理学を専攻する大学院生になりました。大学院在学期間中では、研究の基礎知識を修得しながら、特徴的な組織構造と独特な生物学的性格を有する唾液腺腺様嚢胞癌について研究を進めました。

長崎大学歯学部口腔病理学講座にて留学生活が半年間たったところ、アメリカの名門エール大学に深造して帰国した朔敬先生にご指導をたまわることになり、唾液腺腺様嚢胞癌を実験対象とし、癌の間質内に基底膜型ヘパラン硫酸プロテオグリカン等の細胞外基質について、研究を進展させてまいりました。実験が想像以上におもしろい方向へ展開したので、朔先生のお勧めにより新潟大学に転勤し、興味深い細胞外基質についての研究もつづけることとなりました。

現在、新潟大学の普通の一職員として働いていますが、歯学部の関係者たち、とくに口腔病理学講座の皆さんに、あたたかく見守っていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。子供の頃から、映画鑑賞が趣味で、とくに日本の映画がこのみで、日本人の人情と義理と女性の優しさに憧れていました。これからも、日本の文化を深く理解し、変な日本語を喋らないように努力していくつもりです。